

(A) 半径 1 の円に内接する正 n 角形の辺および対角線の異なる長さの平方の和 S_n を求めよ。

【準備】 ($n=2$), $n=3,4,5,8$, ($n=7,9: pass$) について, 具体的に計算してみよう。

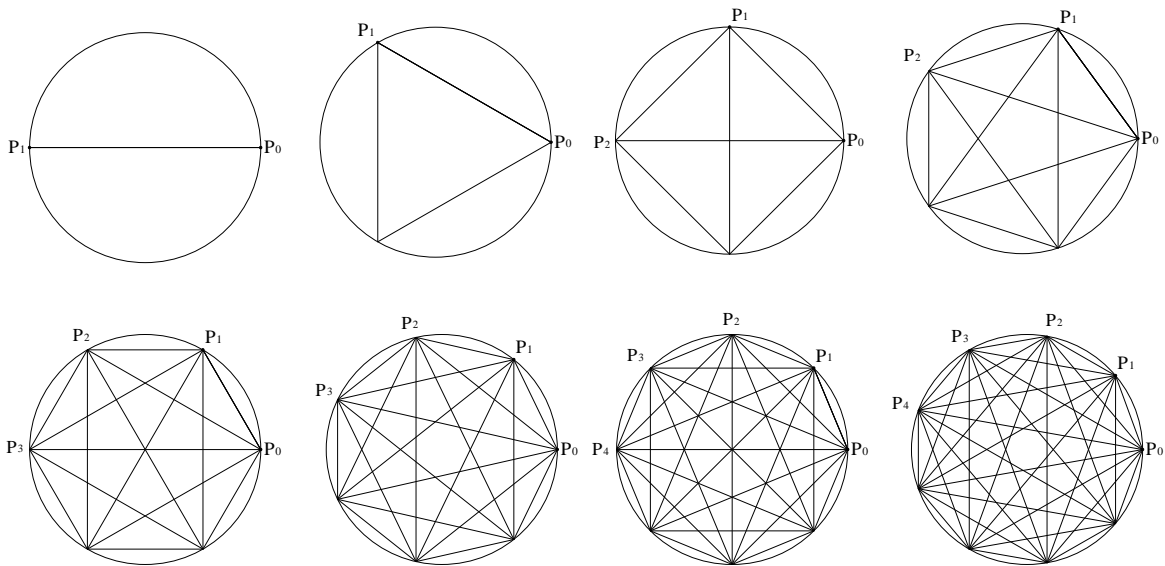
◎正三角形の話題を持ち出すことに疑問があると思いますが・・・計算だけしてみよう。

◎正七角形, 正九角形の計算は, パスすることになります。

[Hint] 円の中心を O とする。 $\triangle OP_0P_k$ に余弦定理

$$P_0P_k^2 = 1^2 + 1^2 - 2 \cdot 1 \cdot 1 \cdot \cos \angle P_kOP_0 = 2 - 2\cos \angle P_kOP_0$$

を用いるとよい。 $\cos 72^\circ = \frac{-1+\sqrt{5}}{4}$, $\cos 144^\circ = \frac{-1-\sqrt{5}}{4}$ を使うとよい。



($\circ n=2$ $P_0P_1^2 = 2^2 = 4$ よって, $S_2 = 4$)

$\circ n=3$ $P_0P_1^2 = 3$ よって, $S_3 = 3$

$\circ n=4$ $P_0P_1^2 = 2$, $P_0P_2^2 = 4$ よって, $S_4 = 6$

$\circ n=5$ $P_0P_1^2 = \frac{5-\sqrt{5}}{2}$, $P_0P_2^2 = \frac{5+\sqrt{5}}{2}$ よって, $S_5 = 5$

$\circ n=6$ $P_0P_1^2 = 1$, $P_0P_2^2 = 3$, $P_0P_3^2 = 4$ よって, $S_6 = 8$

$\circ n=7$ パス

$\circ n=8$ $P_0P_1^2 = 2-\sqrt{2}$, $P_0P_2^2 = 2$, $P_0P_3^2 = 2+\sqrt{2}$, $P_0P_4^2 = 4$ よって, $S_8 = 10$

$\circ n=9$ パス

【A問題(予想)】半径1の円に内接する正 n 角形の辺および対角線の異なる長さの平方の和 S_n は

$$S_n = \begin{cases} n & (n: \text{奇数}) \\ n+2 & (n: \text{偶数}) \end{cases}$$

と予想できる。このことを証明するために、次の補助定理を示す。

【補助定理1】 図のように単位円周上に n 個の点 P_k ($k=0,1,2,\dots,n-1$)が

等間隔で並んでいるとき、単位円周上の任意の点 P に対して、

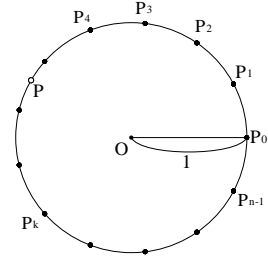
$$\sum_{k=0}^{n-1} PP_k^2 = 2n$$

が成り立つ。

【証明】 $n+1$ 個の点の位置ベクトルを $P_k = \vec{p}_k, P = \vec{p}$ と表す。

$$\sum_{k=0}^{n-1} PP_k^2 = \sum_{k=0}^{n-1} |\vec{p}_k - \vec{p}|^2 = \sum_{k=0}^{n-1} (|\vec{p}_k|^2 + |\vec{p}|^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{p}_k) = \sum_{k=0}^{n-1} (1+1-2\vec{p} \cdot \vec{p}_k)$$

$$= 2n - \sum_{k=0}^{n-1} 2\vec{p} \cdot \vec{p}_k = 2n - \vec{p} \cdot \left(\sum_{k=0}^{n-1} \vec{p}_k \right) = 2n - \vec{p} \cdot \vec{0} = 2n \quad \text{【証明終わり】}$$



【A問題の証明】

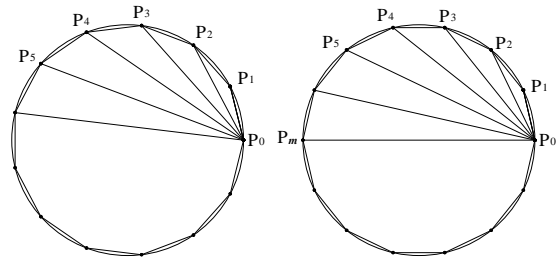
(ア) n が奇数の時、

$$S_n = \frac{1}{2} \times \sum_{k=0}^{n-1} P_0 P_k^2 = \frac{1}{2} \cdot 2n = n$$

(イ) n が偶数の時、 $m = \frac{n}{2}$ とする。

$$S_n = \frac{1}{2} \times \left(\sum_{k=0}^{n-1} P_0 P_k^2 + P_0 P_m^2 \right) = \frac{1}{2} (2n + 2^2) = n + 2$$

【証明終わり】



※ この証明は、ベクトルを利用しているが、複素数の利用や、座標の計算でも本質的には、同じ証明が書ける。

例えば、 $|z|=1$ 上に等間隔に存在する n 個の複素数 ω_k と $|z|=1$ 上の任意の複素数 ω に対して、

$$\begin{aligned} \sum_{k=0}^{n-1} PP_k^2 &= \sum_{k=0}^{n-1} |\omega_k - \omega|^2 = \sum_{k=0}^{n-1} (|\omega_k|^2 - \omega_k \bar{\omega} - \bar{\omega} \omega_k + |\omega|^2) = \sum_{k=0}^{n-1} (2 - \omega_k \bar{\omega} - \bar{\omega} \omega_k) \\ &= 2n + \bar{\omega} \sum_{k=0}^{n-1} \omega_k + \omega \sum_{k=0}^{n-1} \bar{\omega}_k = 2n + \bar{\omega} \cdot 0 + \omega \cdot 0 = 2n \end{aligned}$$

面倒な表示になるが直接座標を利用し、等間隔に存在する n 個の点を一般性を失さないで、

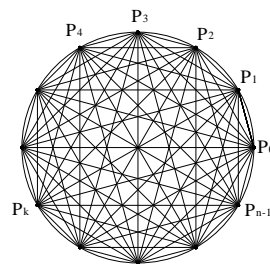
$$P_k = \left(\cos\left(\frac{k\pi}{2n}\right), \sin\left(\frac{k\pi}{2n}\right) \right)$$

と表しても証明できる。

(B) 半径 1 の円に内接する正多角形の辺及び対角線全ての長さの平方の和 T_n を求めよ。

【B 解答】

$$T_n = \frac{1}{2} n \cdot \sum_{k=0}^{n-1} P_0 P_k^2 = \frac{1}{2} n \cdot 2n = n^2$$



【補助定理 2】 単位球面にある円周上に n 個の点 P_k ($k = 0, 1, 2, \dots, n-1$) が,

$\sum_{k=0}^{n-1} \vec{p}_k = \vec{0}$ を満たすように並んでいる。このとき、同じ単位球面上の

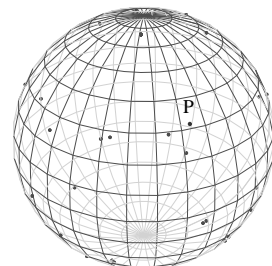
任意の点 P に対して、

$$\sum_{k=0}^{n-1} PP_k^2 = 2n$$

が成り立つ。

【証明】 補助定理 1 の証明を、この $n+1$ 個の点に適用すれば良い。

【証明終わり】



(C) 半径 1 の球に内接する正多面体のすべての頂点間の距離の平方の和 U を求めよ。

【解答】 単位球に内接する正多面体は、中心 O に関して対称な 2 点が存在している。その 2 点を、 $P(\vec{p}), Q(\vec{q})$ とすれば、 $\vec{p} + \vec{q} = \vec{0}$ である。よって、全て頂点のベクトルの和は $\vec{0}$ である。

よって、 $U =$ 「頂点数の平方」となる。

正多面体の U の値を一覧表にする。

単位球面に内接する正多面体の U の値一覧表					
正多面体名	面数 f	辺数 e	頂点数 v	$U = v^2$	備考
正四面体	4	6	4	16	
正六面体	6	12	8	64	
正八面体	8	12	6	36	
正十二面体	12	30	20	400	
正二十面体	20	30	12	144	